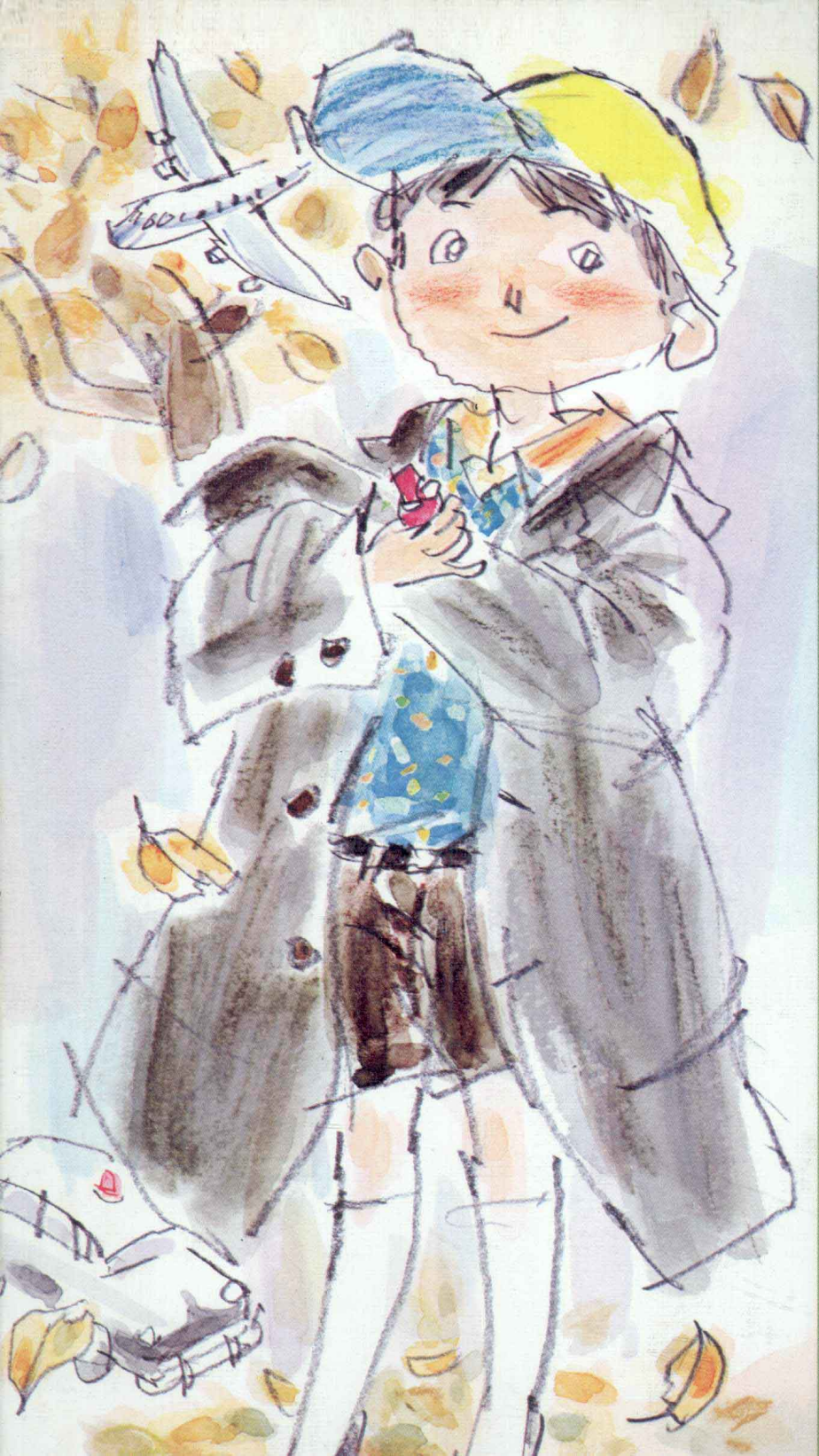
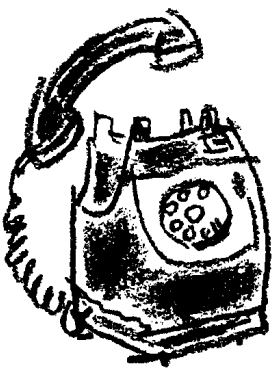


おとうさんは二年生

菊地　正・さく　山中冬児・え

大日本の創作どうわ　大日

NDC. 913
おとうさんは二年生
菊地　正（きくち ただし）
大日本図書　1979（昭54）
118P. 22cm（A 5）
（大日本の創作どうわ）



大日本の創作どうわ

1979年 8 月20日　第 1 刷発行
1980年 2 月20日　第 2 刷発行

著者
菊地　正

画家
山中冬児

発行者
佐久間裕三

印刷／東洋印刷
製本／岸田製本

発行所
大日本図書
東京都中央区銀座
1丁目9番10号
電話・03-561-8671
振替・東京9-219番

おとうさんは二年生　© 1979　T. KIKUCHI & F. YAMANAKA

おとうさんは二年生

菊地　正・さく
山中冬児・え

おとうさんは二年生／もくじ

ぼくは　おとうさん・7
日曜さんかん日・27
へんしゅう室デスク・49
がんばれ　おかあさん・77
サンタクロースは二年生・98

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

❁この本をかいた人❁

菊地　正（きくち　ただし）

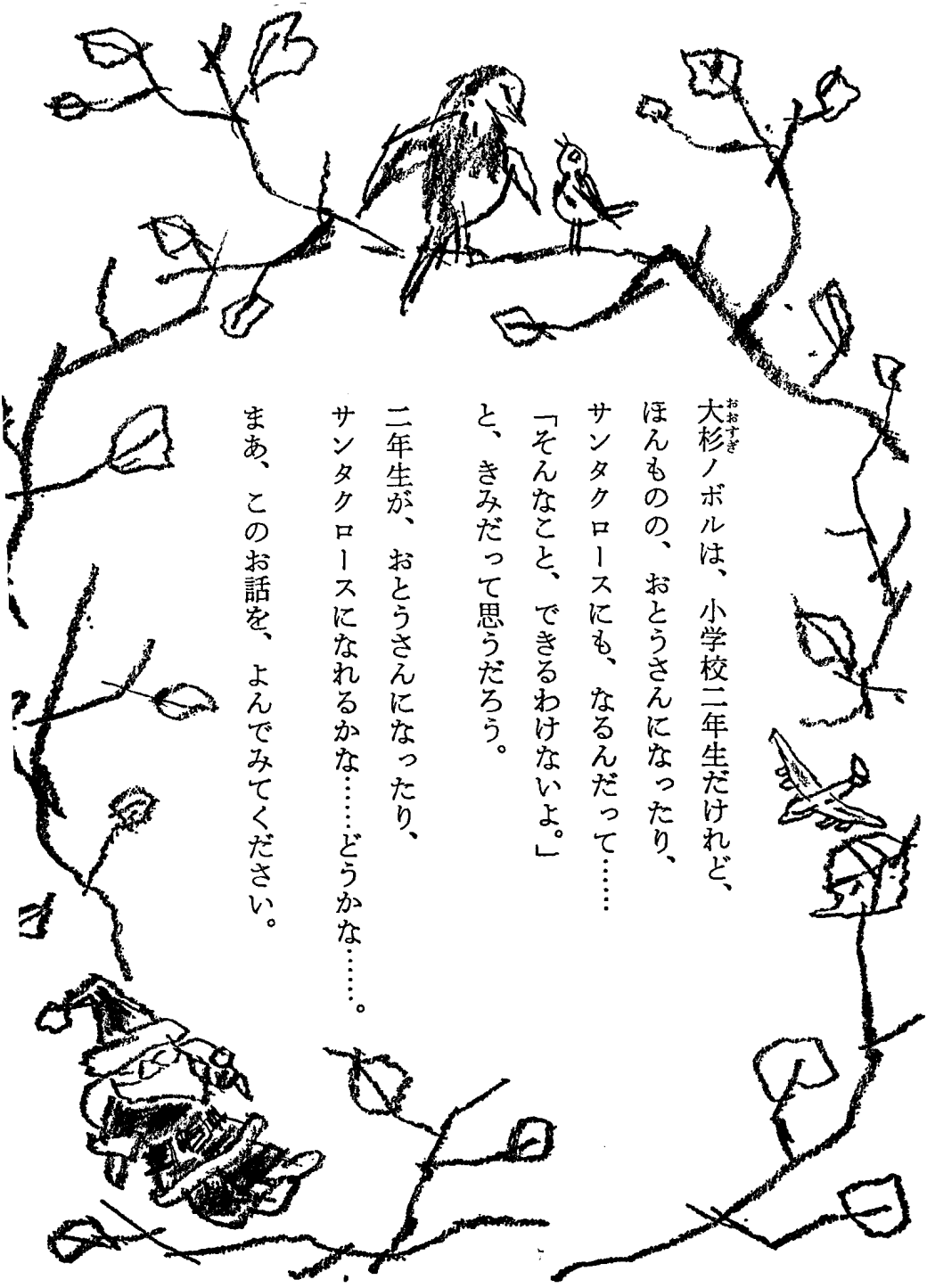
1927年東京に生まれる。同人誌「作家群」「子どもの町」などで創作活動を続け，1972年『母と子の川』（実業之日本社）で第5回日本児童文学者協会新人賞受賞。1976年得度。現在，小学校教員，日本児童文学者協会会員。おもな著書に『野火の夜あけ』（アリス館）『あした天気になあれ』『ゆうれい船の黒ねこ』（いずれも金の星社）『つばき屋敷のひみつ』（小峰書店）『さよなら教室』（ポプラ社）『ばけもの千両』（偕成社）などがある。

現住所：東京都八王子市大和田町5-24-2

山中冬児（やまなか　ふゆじ）

1922年大阪市に生まれる。大阪美術学校油絵科卒業。シベリア抑留生活をへて，戦後，油絵制作のかたわら，装画・装幀の分野でも活躍。おもなさし絵の仕事に，『コッペパンはきつねいろ』（松谷みよ子作　偕成社）『おねえちゃんはしゃしょうさん』（長崎源之助作　実業之日本社）『東京からきた女の子』（長崎源之助作　偕成社）『サーカスの旗が立つ』（長崎源之助作　PHP研究所）などがある。

現住所：東京都世田谷区宮坂1-11-2



大杉ノボルは、小学校二年生だけれど、
ほんものの、おとうさんになったり、
サンタクロースにも、なるんだって……
「そんなこと、できるわけないよ。」
と、きみだって思うだろう。
二年生が、おとうさんになったり、
サンタクロースになれるかな……どうかな……。
まあ、このお話を、よんでみてください。

ぼくは　おとうさん

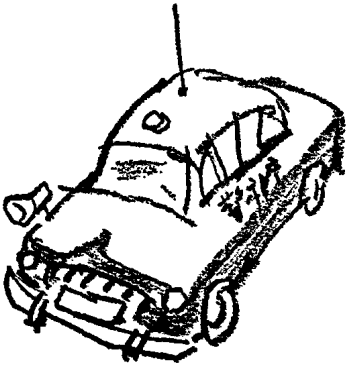
1

ピーポー　ピーポー　ピーポー

遠くのほうから、パトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

ぼくは、日あたりのいいえんがわで、プラモデルのパトカーをつくっていた。ぼくの名まえは、大杉（おおすぎ）ノボル。小学校二年生で、プラモデルと、ぼうけんが大すきな男の子だ。

「そら、できたぞ。」



表通りのほうから聞こえてくる、パトカーのサイレンにあわせて、

ピーポー　ピーポー　ピーポー

と、ぼくもサイレンを鳴らした。ほんもののサイレンの音は、だんだん遠ざかっていった。

「いやですね。」

いけ垣のむこうで、おとなりの柴田さんちのおばさんと、表通りの長島自転車店のおばさんが、立ち話をしていた。

「このごろは、事故やら、事件やらが、多くてこまりますわ。」

「そうですね、あの、ピーポー　ピーポーという音を聞かされると、いやな気もちになりますね。」

ぼくは、あわてて、サイレンを鳴らすのをやめた。

「このまえも、山本さんのおたくが、どろぼうにあらされたそうですけど、いやですね。」

「なんでも、ねらった家に電話をかけて、るすかどうかを、たしかめてから、しのびこむそうですって。こわいですわ。」

ぼくは、どきっとした。

きょうは、おかあさんと、弟のタカシが、七五三のおいわいで、おじいちゃんの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家に出かけている。タカシは五歳になった。ぼくも五歳のとき、おじいちゃんが、おいわいしてくれた。

おじいちゃんの家は、バスにのって二十分、それから、電車にのって、二つめの駅だから、そんなに遠くない。だから、ぼくも、ときどき、ひとりで遊びに行くことがある。でも、きょうは、あまり行きたくなかった。どうせ、いっしょに行ったって、タカシのことばかりで、ぼくは、かまってもらえそうにない。るすばんしながら、大すきなプラモデルをつくっていたほうがいい。それに、もうじき、プラモデルのコンクールがある。

ぼくが、どきっとしたのは、電話のことだ。さっき、プラモデルをつくっていたとき、電話が鳴ったんだけど、ちょうど、ボンドをつけていたときだったから、手がはなせなかった。ベルは、二十回ぐらい鳴ってから、きれてしまった。

（もしかしたら、どろぼうの電話かもしれない……）

2

ぼくは、きんちょうした。えんがわから、電話のある茶の間を見たら、ぼーっと黒いものが立っている。

そっと茶の間をのぞいたら、けさ、クリーニング屋さんがとどけてくれた、おとうさんの黒い洋服がかかっていた。いつもなら、洋服ダンスにきちんとしまうのに、出かけるまえで、いそがしかったおかあさんが、わすれてしまったのだ。

茶の間にはいって、電話をにらんだ。

(電話がかかってきたら、どうしよう……)

電話に出なければ、るすだと思われるし、電話に出れば、子どもだけだとばかにして、どろぼうが、やってくるかもしれない。時計を見ると、まだ三時半をすこしまわったところだ。

「おとうさんが帰られるまえに、帰ってくるわね。」と、おかあさんはいっていた

けど、おとうさんが帰るのは、七時すぎだ。それも、あんまりあてにはならない。おとうさんは出版社で、へんしゅうのしごとをしている。だから、いつだって帰りがおそくなる。七時ごろに帰れるのは、一週間のうちで二回あればいいほうなんだ。うんとおそいときは、ぼくなんか寝ちゃってて、知らないときもある。

（おとうさんが、帰るまでか……）

と思ったら、ものすごく、心ぼそくなった。

ぼくのおとうさんは、ぜったい、じまんできるおとうさんなんだ。背は高いし、うでは太いし、むねはあついし、がんじょうで、それに、ハンサムなんだ。学生時代、バスケットボールのキャプテンだった。おとうさんのへやには、トロフィーやメダル、記念の写真やパネルがかざってある。ぼくは、おとうさんがだいじにしていたチャンピオンメダルを、一こ、もらっちゃった。

おとうさんがいてくれれば、どろぼうが、何人きたって、びくともしない。

（たよりになる、おとうさんなんだ。）

そう思ったとき、ぼくに、とてもすばらしい考えがうかんだ。
（そうだ、ぼくが、おとうさんになればいいんだ。おとうさんの声をまねして、電話に出れば、どろぼうなんか、わけなく追いはらえる。）
さっそく、おとうさんの声の、れんしゅう開始だ。
「アー、アー、ホンジツはセイテンなり。アー、アー、ぼくは、大杉ユウイチロウ。大杉ユウイチロウは、ノボルくんのおとうさんです。アー、アー。」

3

キロキロキロキロッ
電話が鳴った。
もう、たっぷりれんしゅうしたから、
（さあ、いつでも鳴れっ！）
と、思っていたけれど、いざ鳴ったら、むねがどきどきして、手が出ない。

（おい、大杉ユウイチロウのノボルくん、勇気を出せ！）

思いきって、十回めのベルで、受話器をとった。

「モシ、モシ。」

できるだけ、太い声でいった。

「いそいでね――。」

電話のむこうの、女の人の声は、あわてている。

「てんぷらそば二つと、おかめうどん一つ。三丁目の公園のところの野村です。いいですか、三丁目の公園です。いいえ、公園のところの野村ですよ。」

（なんだ、野村マリちゃんのおばさんか。）

と、ぼくは、すぐにわかった。

野村マリちゃんは、ぼくとおなじクラスの、二年二組の女の子だ。スポーツが大すきで、ドッジボールだって、キックベースだって、男の子に負けないくらい元気がいい。そんなにからだは大きくないけど、声は大きくて、クラス対抗のときなんか大かつやくするから、クラスでも人気がある。それでいて、目がくりくりして、かみの毛がおかっぱで、とてもかわいいんだ。

ただ、すごく、あわてんぼなんだ。

あわてんぼのチャンピオンで、ドッジボールのときなんか、みかたにボールをぶつけちゃったり、あいてにボールをパスしちゃったり、ちょくちょく、しくじってしまう。

教室にはってある、わすれんぼグラフでも、野村マリちゃんが、いちばんなん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com